

なちき
夏敷古窯跡

所在地 常滑市夏敷地内
(北緯34度53分41秒 東経136度50分59秒)
調査理由 常滑西特定土地区画整理事業
調査期間 平成16年4月～7月
調査面積 915㎡
担当者 宮腰健司・早野浩二

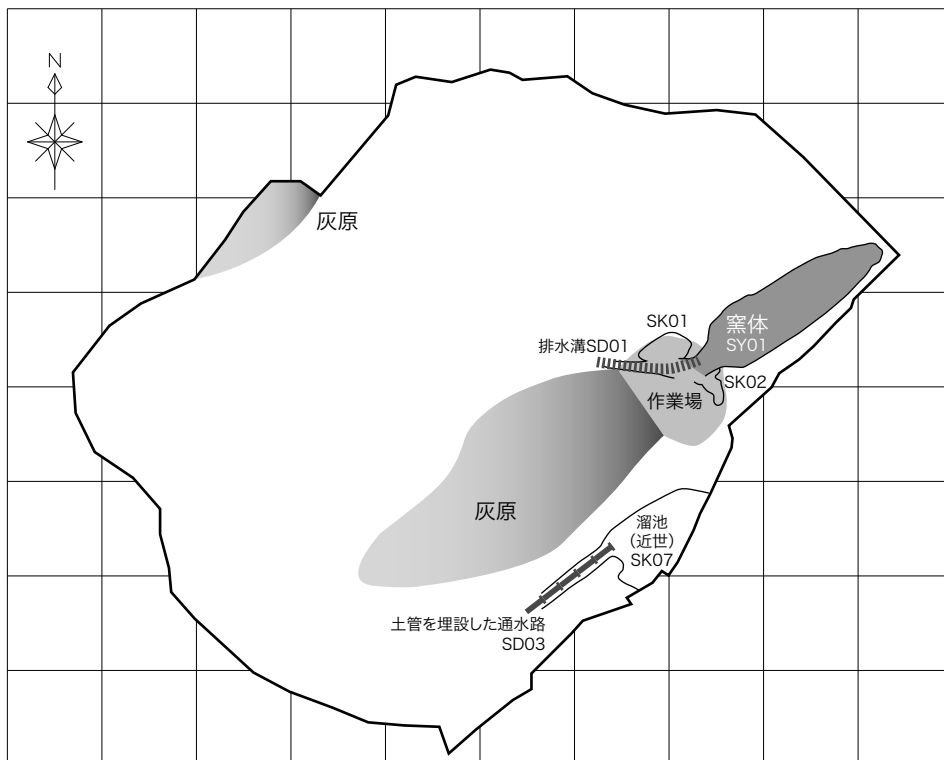


調査地点(1/2.5万「常滑」)

調査の経過 夏敷古窯跡は、常滑市夏敷地内に所在する中世常滑焼の古窯跡である。本窯跡の発掘調査は、常滑西特定土地区画整理事業に伴う事前調査として、都市基盤整備公団(現独立行政法人都市再生機構)より愛知県教育委員会を通じた委託事業として実施した。調査期間は平成16年4月～7月、調査面積は915㎡である。

立地と環境 夏敷古窯跡は、知多半島中央丘陵から西に派生する尾根先端付近の南西斜面に立地する。尾根の標高は約33mである。同一尾根の北斜面には四池A・B古窯、尾根小谷中の東斜面には蛇廻間古窯跡、支谷を挟んだ東尾根上には柴山古窯跡群が立地する。

調査の概要 発掘調査の結果、主要な遺構として窯体1基(SY01)、窯体に付随する作業場と灰原を確認した。窯体の南東側、北西側と灰原の末端は農地や溜池、道路の造成による大きな改変を受けていて、本来の窯体の基数、灰原の正確な規模は不明である。また、灰原南西の造成地に近世の溜池(SK07)とそれに付随する通水路(SD03)を検出した。



遺構配置図(1:400)

窯 体 調査区の東端において検出した。主軸方向はN-123°-Wである。窯体の残存は良好で、SY01 焚口から煙道部までが残存し、燃焼室の天井の一部は原位置を維持していた。現存する長さは約11.5m、最大幅は焼成室で約3mである。焼成室には硬化した床が部分的に残存し、焼台の配列、鉢の高台が剥離した痕跡が確認できた。床面の最大傾斜は約35°である。窯壁は1面が残存するのみで、全面的な補修は確認されず、床面下施設も構築されていなかった。また、焼成室には崩落した天井の上面に層厚約5cmの炭化物層が堆積していた。その成因は炭焼窯としての窯体の再利用にあると考えられる。

作 業 場 焚口から前庭部状に続く平坦面を作業場とした。作業場においては、築窯時の整地に伴う陶器を含まない焼土・炭化物の薄層が広がる。前庭部西には排水溝SD01が付随し、下層には除湿を目的とした炭化材の充填が確認できた。前庭部の東西には土坑SK01・SK02が掘削され、焼土・炭化物・陶器が大量に廃棄されていた。

灰 原 灰原は前庭部の南西斜面に分布し、窯体の主軸方向に約16m、それと直交する方向に約8mが残存する。厚さは最大で約1mである。灰原の分布、堆積の状況から、灰原の形成はSY01 1基に付随する可能性が高いと思われる。また、調査区西端部の埋没した斜面上にも遺物の分布が認められた。産状が灰原の末端にも近似することから、SY01の西北に並列して別の窯体が存在した可能性もある。

出土遺物 遺物は灰原から出土した陶器が大部分を占める。これらは常滑窯編年3型式を主体とし、12世紀後半の年代が与えられる。焼成された器種には甕、鉢が多く、次いで三筋壺、碗、皿、少数の羽釜、水瓶がある。他に炭焼窯の操業に関係すると考えられる13世紀前半の土師器伊勢型鍋と山茶碗、溜池の通水路用の床樋として利用された土管がある。(早野浩二)



調査前



調査風景



調査区全景



窯体と灰原



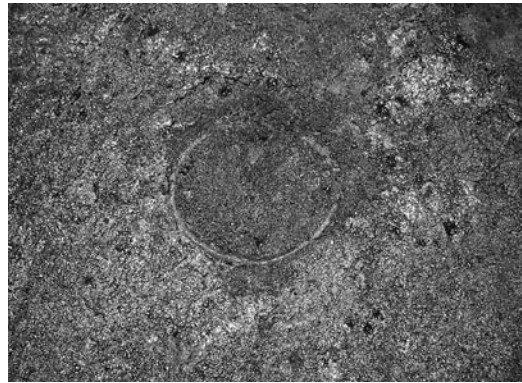
SY01 (焚口から)



SY01 (煙道部から)



SY01 窯壁



SY01 床面



SK01 陶器



灰原の産状



SY01 土層断面



溜池の通水路